
兵士と少女の話

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士と少女の話

【Nコード】

N4956J

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

大陸は小さなきつかけで戦争を起こし、多くの命を大地に還した。敵が人間であるという認識を捨てられない『兵士』と死を覚悟している『少女』は全てを捨てて旅に出た。

“ e n c o u n t e r ” (前書き)

軍事ネタやはあまり詳しくないので突っ込まないでくださいm(

——) m

感想お待ちしてます

“ encounter ”

兵士は戦場にいた。正確には戦場だった場所にいた。大きな大陸には幾つもの国家とそれらを統べる首都があった。ある日大陸内の2つの国が戦争を始めた。きっかけは些細なことだったがそれらは他の国を巻き込み戦火を広げていった。

士官学校を主席で卒業した兵士とはある戦場で残党狩りをしていて逃げ惑う人を撃ち、倒れたところでさらに頭を撃ち抜く。ただそれだけのこと―だがそれだけのことが兵士には苦痛でしかなかった。兵士には既に戦意をなくしている人を殺すことが苦痛でしかなかった。だが殺せば殺しただけ誉められた。

同期の兵士が軽い口調で言った。

「気にすんな。どうせ奴らは死ぬ運命だったんだからさあ」

先輩の兵士が叱咤するかのように言った。

「絶対に躊躇するな。迷いは死を招くぞ」

兵士の上官がため息を吐きながら言った。

「まだアイツらが人に見えるお前が羨ましいよ」

兵士にはそれらの言葉は罪の意識を軽くするどころか重荷にしかなかった。

「気を抜くなよ」

「分かってる」

そんな一言を交わすと兵士は戦場に向かった。

兵士は覚悟していた。敵が人に見えるうちに手に持ったライフルで逝こうと。

そこも既に殺戮が終わっているらしく、残っている人を撃ち殺すのが兵士の仕事だった。6人で一つ一つの建物を確認しながら移動していく。7つ目の建物を確認したところで2発分の銃声が響いた。それと同時に後ろを歩いていた二人の頭が地面に叩き付けられたトマトのようにぐちゃぐちゃになって吹き飛ぶ。

「ちっ！！撃つてきや…」

誰かが叫んだがその叫びは最後まで続かなかった。無慈悲な弾丸が叫んだ兵士の頭の右半分を吹き飛ばしたからだ。味方が銃声のした方に向かって撃った。しかしまた味方の顎が吹き飛ぶ。残ったのは兵士と同期の兵士だけだった。兵士は覚悟して撃ってきた敵に狙いをつけて撃った。兵士の撃った弾は寸分の狂いもなく敵の腕を貫く。しかし同時に同期の兵士は敵の弾により左胸に穴を空けられていた。銃声は鳴り止み、聞こえるのは兵士の呼吸と風の音だけ。しばしの沈黙が過ぎ、兵士は周りを見た。そこには廃墟と味方の無惨な死体が転がっているだけだった。

「…とりあえず連絡しなくては」

こんな見晴らしのいいところにいてはまた撃たれる。そのためすぐに最寄りの建物に入った。しかしそこには先客がいた。

「……」

先客の少女は兵士に目をくれずボロボロになったマリア像に祈りを捧げていた。兵士はその姿に目を奪われた。

「何をしている？」

ふとおもいたって兵士は少女に話しかけてた。

すると少女は兵士に初めて気づいたらしく、少し肩を震わすと兵士の方を見る。兵士は改めて祈りを捧げていた少女を見た。歳はまだ十代半ば、質素な真つ白のワンピースが黒く長い髪を引き立てている。もう少し怯えていると思うていたが少女の視線はしっかりと兵士を捕えて動かない。

「…マリア様に祈りを捧げていたのです」

聞こえてきたのはまるで実際に女神が話しかけてきたように感じる

ほど美しくそして透き通った声。兵士は一瞬我を失ったがすぐに質問を再開する。

「マリア様に守ってもらうためにか？」

「安心してマリア様のところに行くためです」

「…死ぬのは怖くないのか？」

「人は遅かれ早かれいつか死ぬのです」

「じゃあ俺がこれで君を殺そうとしても怖くないのか？」

そう言いながら兵士は持っているライフルを少女に見せる。しかし少女はそれを見ても怖れる素振りを全く見せない。

「貴方はまだ私達を人と見てくれます」

「っ！？」

兵士は自分のことを突然当てられたことに動揺した。なんとか気持ちを落ち着かせて兵士は問い返す。

「何故そう思うんだ？」

「だってそうでなければ戦場で敵と話すなんてありません」

少女の言葉は的を射ていた。

「現にまだ私は生きています」

覚悟というものは意外と簡単に変えることが出来るものらしい。兵士は帰ったら死ぬ覚悟をしていた。しかし今は帰ったら軍を抜ける覚悟をしていた。

「君、名前は？」

この場に全く合わない質問をした兵士に少女は内心驚く。だが驚いた素振りを見せずに答える。

「…私が小さい時に両親も仲の良い友人達も死んでしまいました。

私の名前はその時死んでしまいました」

「……」

少女が言っているのは今も続いている戦争の初期のことだろう。その頃の兵士はまだ戦場で敵を殺すことが当然だと思っていた。敵を殺せば英雄になれると思っていた。

「…俺はここから生きて帰ったら軍を抜け、そして旅人になる。そ

の時は一緒に来ないか？」

「えっ？」

自分達を殺すために来た人が殺すのを止めて、自分を助けそして旅に出る。少女は何故兵士が自分を誘ったのか分からなかった。

「いや…単に一人は寂しいだけだし…嫌なら断わってもいいし…」
まるで照れ隠しのように頭を掻きながら意味もなく建物の隅を見ながら兵士は言う。そんな兵士を見ながら少女は彼が本気で軍を抜け旅人になるつもりだと感じた。

「それは面白そうですね…でもどうやってこの広い大陸を移動するのですか」

「えっ…あつ、それなら知り合いがもういないバギーがあるってゆうからそれ譲ってもらって…」

「それは何人ぐらい乗れますか？」

「えっと…多分四人だけど後部座席は荷物を置くから実質二人…かな」

「それなら私も乗れますね」

兵士はまさか本当に少女がついてくるとは思ってもいなかった。しかし兵士には少女が冗談を言っているようには見えなかった。

「だがいきなりは無理だ。とりあえず3日待ってくれそしたら俺はここに戻る」

「…分かりました」

少しだけうつ向いたがやはり決意は変わらない。

「大丈夫だ。必ず来るさ」「…はい」

そうして兵士は戦場を離れ、少女は戦場で兵士が来るのを待った。

「准将。折り入って話があります」

戦場よりベースキャンプに戻った兵士は味方達の酒盛の誘いを断わり、その地区の司令官である准将に会いに行った。

「どうした」

「私はさきの戦場で亡くなったことにしてもらえませんか」

既に老眼鏡がなければモノを見ることさえ困難な准将は老眼鏡の奥にある老人とは思えないほど鋭い目を少し細め、そのまま立ち上がると兵士に背を向け歩きだし本棚の前で止まった。

「…何故だ」

本棚より取り出した分厚い本をパラパラとめくったかと思うとすぐに閉じ、また開ける。だがすぐに閉じ、また開ける。それを繰り返して本を本棚に戻すと重くしつかりとした声を発する。

「自分は未だに敵が人間に見えてしまえます。敵が人間に見えてしまつて以上どうしても敵を殺すのを躊躇ってしまうのです。そんな奴が戦場に出ても殺されるだけで、そのせいで士気を下がり味方が殺されるのは嫌だからです」

兵士はただ自分のせいで味方が殺されるのは嫌だと主張した。しかしそんなのは理想論でしかないと言っていた。それと同時に人手不足の今ではこの頼みを即却下されると感じていた。

「……」

准将は言葉を発することもなく、自分の机まで行くとそのままペンを手にとり紙に何かを書き始める。

「あのー」

「報告書の偽造はバレれば軍法会議ものだ」

「……」

准将が書いていたのはその戦場での戦死者のリストだった。

「…准将」

「お前がそう思うなら思つた道を行けば良い」

兵士の方を見ずにさつきとは違い、どこか優しさのある声で兵士に言う。

やがて報告書を書き終えた准将は相変わらず鋭い目を兵士に向ける。

しかしその顔はさっきの声と同じくどこか優しさがあった。

「してお前は軍を辞め、どうするのだ？」

「自分は旅人になろうと思っています」

兵士の返答に呆気にとられた准将は口を少し開いたがすぐに閉じた。

「…何故だ」

「軍が敵と言っている人達をもっと知りたいからです」

「一人でか？」

「はい」

もちろんさっきの戦場で出会った少女と一緒になんて言えるわけがない。兵士は理解していた。だからこそ嘘をついた。

「…お前は嘘が下手だな」

「嘘をつくのが嫌いですから」

「そろそろ飯の時間だよ」

「すぐに行く」

少女は兵士と別れてすぐに戦場を離れ、人々が避難している洞穴に向かった。そこにはさっきの戦場から逃げ延びた人々が集まっていた。

「どうしたんだ、嬉しそうな顔をして」

「えっ？」

呼びに来た少女と顔見知りの少年は戦場で多くの同胞の血が流れたのに少女が少し微笑んでいるのに気がついた。

「あ、ううん。何でもない」

少女もまさか『3日後に戦場で知り合った兵士と旅に出る』なんて言えるわけがない。

「…もう配り始めてるよ」「わかった。すぐ行く」

少年は少女の言葉を信じ、すぐに食料の確保に向かった。少女も少年の後について部屋から出ようとして、少年の姿が見えなくなると立ち止まった。

「…さようなら」

誰に言うわけでもなく少女は一人で眩き、少年の消えていった方に向かい歩き始めない。

「…ありがとう」

さっきの戦場で出会った兵士の照れて赤くなった顔を思い出し、少女は少年の消えていった方に向かい歩き始めた。

そして約束の日。兵士と少女は初めて出会ったマリア像の前で再会した。

兵士はジーンズに無地のシャツの上に茶色のジャケットをはおり、知り合いからタダで貰った迷彩柄のバギーに着替えや二人分の寝袋など、旅に必要なモノを積んでやってきた。

少女は初めて兵士と会った時に着ていたモノと同じのワンピースと麦ワラ帽を身につけ、自身が持っているモノで一番大きいリュックに着替えや洞穴から無断で盗ってきた携帯食料などを背負い待っていた。

「ごめん、待たせたね」

「時間を決めて待ち合わせしてないので待つてはいません」

「女より先に待ち合わせの場所に着いてないなんて俺のポリシーに反する」

「…ふふっ」

左手を腰にあて右手を強く握り真剣な顔で力説する兵士に少女はキョトンとし、すぐに我にかえり微笑んだ。

「どうした？」

しかし兵士は少女が何故微笑んだか分からずキョトンとしたが理解出来ず、すぐに首を傾げた。

「あの時とはまるで別人みたい」

「軍にいたらどうしても我を出せないからね」

もちろんそれは上の人間と話す時だけだが兵士は必要以上に我を出

さず『仕事』をしていた。

「それが本来の兵士さんってことですね」

「まあ、そうだな」

ひとしきりこれからのことを話し合った結果、時計回りに大陸を旅することになり、出来るだけ多くの国を回れるように一つの国には最低1日最高5日滞在することになった。

「…行きましようか」

「ああ」

そして二人は

目的地のない

旅に出た

“wait”（前書き）

感想お待ちします

“wait”

「おじさん達、誰？」

雨宿りによった社の中に一人の少女がいました。少女の身なりはお世辞にも綺麗とは言えず、体は痩せ細っており健康態とは言えませんが。

「旅人さ、あと俺はまだ24だ」

青年が答えました。

「旅人？」

「そう」

「なんで旅人になったの？」

「世界を見たかったから」「世界を？」

「ああ」

「どうして？」

「俺があまりにも小さい存在だったから」

「ふーん」

少女は理解しているのか、していないのか分からない返事をしました。

「ところでキミはこんなところで何をしているのかな？」

そこで青年と一緒に旅をしている黒髪の少女が話しかけました。

「ボクは『キミ』じゃない。『××××』って名前があるんだよ」

「ごめんね『××××』ちゃん。じゃあ改めて聞こうかな。『××××』」

「××××」ちゃんはこんなところで何をしているのかな？」

少女の問いに「××××××」は顔をうつ向け黙りこんでしまいました。

「…待つてるの」

しばしの静寂の後に「××××××」はたった一言だけ言葉を発するだけでした。

「誰を？」

「…ママとパパを待つてるの」

「そうなんだ…どのくらい待ってるの」

「…ずっと」

「え？」

「ママもパパもボクが小さい頃にいなくなってから…ずっと…ずっと待ってるの」

「……」

「でも今日も帰って来ないみたい」

「……」

「でもきつといつか帰って来る」

雨が止んだので旅人と名乗った青年と黒髪の少女は少女に携帯食糧を分けてお礼を言った少女と別れ、近くの国を目指してバギーで森の中を走っていた。

「兵士さん」

兵士と呼ばれた旅人は助手席に乗っている少女に呼ばれ、速度を落としながら返事をする。

「どうした」

「あの娘の両親は何処にいるんでしょうか？」

「俺が知るか」

「……」

兵士は落ち込んでしまった少女を見て後味の悪さを感じたのか言い直す。

「…多分、普通の生活してるか…もしくは仏さんだな」

「…あの娘を遺して…ですか」

「それ以外に考えられないからな」

「…あんまりです」

「そうだが…俺達にはどうすることも出来ないさ」

「……」

「あれは…商人でしょうか？」

少女の目線の先には馬車を巧みに操り、でこぼこの道を進んで行くしつかりした布地だが派手さが無い素朴な服を着ている丸い体型の男がいた。

「あんだけ大きな荷馬車と服装からしてそうだろうな」

兵士はバギーを脇に止めてから降り、商人と思われる男に『止まってくれませんか』と手を振り合図をした。それに気付いた男は兵士に向かって『わかりました』と手を振り返しました。

「こんにちは」

「おや珍しい。こんなところで人に会うなんて」

「俺たちもこんな薄暗くてじめじめした森の中で人に会えるなんて…神のお導きでしょうかねえ」

（柄でもないことを言いますね）

（商人と話す時はできるだけ神を信じてる感じで話すんだ）

「見たところ行商人のようですが何故こんなところを通ってられるのでしょうか？」

「ああそれはですね…」

行商人は勿体ぶって言葉を切り

「宣教師様のお言葉に従ったからですよ」

たつぷり一秒ほど溜めてからそう言った。

「宣教師様…ですか」

「はい。先程私が出てきた町で偶然出会った宣教師様が『平原の方ではなく森の中を通って行きなさい』と申されたので」

「他に何か言っていますでしたか？」

少女が質問をする于行商人は笑顔で応え^{こた}ました

「『森を抜けたところにある社にあるモノを拾いなさい。そうすれば必ず商売が上手くいきます』とも言っておりました」

「……」

「兵士さん」

商人から幾らか携帯食糧を買い、は商人が見えなくなってから少女は兵士に話しかけました。

「なんだ？」

「あの人は『××××』ちゃんを拾うんでしょうか…」

「……」

兵士は応えられません。

「では質問を変えます」

「ああ……」

「あの人の宣教師さまはいつの日か『××××』ちゃんを向かいに行くんでしょうか」

「…行こうか」

兵士は少女の質問にまた応えることが出来ませんでした。

「はい」

しかし少女はその事を気にせず返事をしました。

バギーのエンジン音が森に響き渡り、その音に驚いた野鳥が一斉に飛び立ちました。

「おじさん、誰？」

少女は問いかけます。来る日も来る日もいつかママとパパが帰ってきて楽しく過ごせると信じて…。

“wait”（後書き）

なかなかネタが思いつかばないので更新は遅くなると思いますが
長にお待ち下さい。

“ d i s c r i m i n a t i o n ”

「ひとつだけ注意をしておきます。滞在中は必ずこれをつけて下さい」

二人は簡単な審査を終えて入国する直前に北門の審査官から腕輪を付けさせられた。それは専用の鍵を使わなければ外れないようになっていた。

「これは一体？」

兵士が質問するも審査官からの返答はありません。ただ早くそれをつけると言いたげだったので黙ってつけた。

「では我が国を満喫してきてください」

事務的な口調を背に二人を乗せたバギーは入国した。

「どうしてこれを付けなければいけないのでしょうか？」

ひとまず車庫のあるホテルにチェックインして、観光と必要な物品を揃えるために市内をバギーで散策していた。

「国民と旅人を区別するためだな」

「どういうことですか？」

「そこまでは分からないな、まあ何か理由があんだろうな」

「おや、旅人さんかい」

「どうも」

「まあ、ウチは小さな店だけど旅に必要なものは針から銃弾までなんでも揃っているからゆっくり見ていきな」

「ありがとうございます」

「あの…」

「んっ、なんだいお嬢ちゃん」

「この腕輪は一体どういう意味があるのですか？」

「それかい？そいつはな―」

「いらつしゃい、旅人さん」

「どうも、この店のお勧めって何ですか？」

「それならコイツがお勧めさ」

「…パンとクリームを五段ほどサンドしたのなんて少しきついな」

「そうですか？私はこれくらいならいけそうですけど」

「別腹ってやつか…太るぞ」

「…覚悟を決めて食べるから平気です」

「あつそ。じゃあそいつを一つ」

「あいよ」

「あつ、それと」

「なんだい？」

「腕輪コイツに何の意味があるか分かりますか？」

「それはね―」

翌日の正午過ぎに兵士と少女は出国の手続きをしていた。

「どうでしたか、我が国は？」

「……」

南門の審査官の問いかけに少女は答えない。兵士も何とも言えない表情で審査官を見ている。しかしそんなことを気にせず審査官は二人の腕輪を手際よく外した。

「しかし…よく生きておられましたね」

その言葉に素早く反応した兵士は少女を自身の後ろにかばうのと同じ時に腰にある拳銃を抜いて審査官に向けた。

「大丈夫です。既に外れていますからお二人には適用されませんよ」

腕輪を見せながら言う審査官から標準を外した兵士は言った。

「国内に居たときはあまり気にしてられなかったがどうして『この腕輪を付けている人間を殺しても構わない』って法律があるんだ？」

「正確には『この腕輪を付けている人間が犯罪―どんな軽犯罪…それこそポイ捨てだろうとしたら殺しても構わない』ですね。しかしどこから話したらいいのでしょうか？」

「さつさと次の国に行きたいから簡単に頼む」

兵士の言葉に審査官は「分かりました」と言うと言り始めた。

―この国は『旅人を逮捕、または有罪にしてはいけない』という法律がありました。大半の旅人は迷惑をかけることもなく滞在していましたが、それでもその法律を知り、犯罪を犯すタチの悪い旅人は少なくなかったのです。

あるとき、一人の旅人が一人の国民と揉め事を起こしました。そのうちそれはエスカレートしていき、遂に旅人は国民を殺してしまいました。それを見ていた警官はすぐに殺人罪で旅人を捕まえようとしました。それが法律によって旅人は無罪放免されました。

あるときは旅人に変装した山賊達が入国し、宝石などを盗みましたが決して捕まることはありませんでした。

そのようなことが増えたある日、多くの国民が法律改正のために立ち上がりました。そして三日間にも及ぶ交渉の末に現在の法律が制定されたのです。

「お分かりいただけましたか？」

「…ちよつとやり過ぎではありませんか？」

話を終えた審査官に少女は問いかけた。

審査官は「確かにそうです…」と言うとそこで言葉を切り、複雑そうな顔をして言いました。

「ほとんどの国民が納得しているので仕方ありません。なんせこの

法律は二日前に制定されたばかりなんですから」

“ Ownership prohibition ”

「ところで貴殿方は書物を何かお持ちでしょうか？」

昼過ぎに入国審査が終わり問題なく入ろうとする兵士と少女に審査官は尋ねた。

「えっと…それってこの絵本ですか？」

「はい。この国は書物の持ち込みは許可されていないんです」

「じゃあ絵本「イラスト」は北側にある城門で届けてもらえませんか」
「分かりました」

入国してまず初めに目についたのは中央に見える時計のついた大きな建物でした。その建物はこの国にあるどの建物よりも高く、歴史を感じさせた。

「凄いですね」

「ああ、あんな凄いのとはなかなか無いだろうな」

そんな感想をもらしながら兵士と少女はホテルを探すためにバギーを走らせた。

一時間も起たないうちに安いがそれなりに設備の整ったホテルにチェックインしオーナーに先程みた建物は一体何なのか兵士は尋ねた。
「あれは図書館ですよ」

「図書館？」

兵士の質問に答え、それからオーナーは得意気に話し始めた。

「はい、この国は貧富の差による知識の有無をなくすために誰でも無償で本を借りることが出来るのです。そのためどんなに貧しくて困窮している人でも努力をしてしっかりと収入を手にすることが出来るのです」

「そうなんですか」

感心したように少女に言う。

「開館時間は08:00から23:00までですから貴方達も行ってきたらどうですか？」

「旅人さんですか？ではこちらの用紙に氏名を記入してもらえますか？」

「分かりました」

図書館に入るには証明書が必要のようであり、それに書かれていた内容に目を通したうえで二人はサインをしていた。

「しかし凄い蔵数ですね」

まだロビーに入ったばかりなのに二人の前には隙間なく―それでも本は傷まないように丁寧に置かれている5mはあるであろう本棚が中身と同じ様にびっしりと並べてあった。

「この国にある全ての書物がありますからね。それこそ学校の教科書からいかがわしい本まで」

「そうなんですか」

司書の自慢気な言葉に感心したように少女が言う。

「ではこちらのカードをお渡しします。これさえあればこの館内にある全ての本を借りることが出来ます。返却するときは出国の際に審査官に渡していただければいいです」

「わかりました」

すぐに完成したそれぞれのカードを司書から受け取り二人は入館した。

「ところで兵士さん」

「どうした？」

「『いかがわしい本』ってなんですか？」

「……少女よ」

「はい」

「キミにはまだ早い」

「…？」

「こんにちは、旅人さん」

図書館にて滞在中に読もうかと思った本を物色中に兵士は老紳士に声をかけられた。

「どうですか、我が国自慢の図書館は？」

「凄いの一言につきますね。私がいた国ではこんなにも多くの本がある場所なんてありませんでしたからね」

兵士の言葉に「そうですね」とまるで自分が誉められたかのように嬉しそうに老紳士はうなずく。

「ここなら読みたい本は必ず見つかりますから毎日通っているんですよ」

「毎日ですか…やはり読書がお好きなのですね。そうすると自宅にもさぞかし多くの本をお持ちなんでしょうね」

「いいえ、家には本など一冊もありませんよ」

「…はい？」

「おや、ご存知ないですか。我が国では書物の所持を禁止なのです」「それは何故ですか？」

「全ての国民が平等に知識を持てるためですよ」「平等に？」

「はい、例えば医者になりたい二人がいました。一人はお金に不自由なく、もう一人は今日の食事すら危うい。お金持ちは何冊も医学書を買えますが貧乏はただ一冊も買えません」

「それが不公平だと？」

「そう、人は誰しも平等なのです。知る権利もそうなのです。だから全ての国民が平等に生きる道を選ぶよう、例えばお金に不自由していようと知識を得ることが出来るようにこの決まりがあります」

「なら学校の教科書は？」

「全て国の許可を取り指定の場所に厳重に保存しておきます。裁判官などの専門職は例外的に専門書の所持を認めています」

数刻後、少女は一冊の童話集を、兵士はこの国の歴史が書かれた本を一冊とサバイバル教本を一冊を借りて宿に戻った。

“ Watchmen ”

見渡す限り真つ白な雪原をスタッドレスタイヤに代えたバギーが兵士と少女を乗せて走っていた。バギーは曲がることもせず、ただ直進し目的地を目指していた。それに乗っている少女は初めて見る雪を見ながら楽しそうに兵士に話しかけ、兵士は少女の言葉に相槌をしていた。

その光景を雪原用迷彩服を来た老兵と新兵が見ていた。老兵はアサルトライフルを、新兵はスナイプスライフルをそれぞれ背負っており、二人ともスコープでバギーを目で追っていた。

新兵が『撃ちますか?』と言うと老兵は『やめとけ』と言いながら車を指さした。老兵曰く『あのバギーは某国で開発された防弾使用と同じだ』と。

新兵はその言葉に納得して見張りに専念した。

それからすぐにバギーが停まったので、二人は細心の注意をしながらスコープで見ている。

兵士と少女は車を降りて雪を掘りはじめた。新兵が『何をしているのでしょうか?』と聞くと老兵は『夕食の準備をしているのだろ?』と言いながら、兵士と少女から目を離さずに時計を見せた。

数分起つと兵士が車から固形燃料と新聞紙を持ってきて、少女がコートのポケットからマッチを出して火をつけた。すぐにそれらは燃え始め、煙が空に向かって上がり始めた。

新兵が『もしかしてあれは狼煙ではないですか!?』と興奮しながら言うのと老兵は『違うとは言い切れないな』と言って、新兵に無線で連絡するように伝えて

後頭部から撃たれた。

目の前で咲いた紅い花を見て、遅れて一発の銃声を聞いて新兵はすぐに身を隠そうとしたがそれよりも早く新兵の頭は一発の銃弾によって貫かれた。

「伏せる！」

一発目の銃声に素早く反応した兵士は遠くで血しぶきが上がるのを見て少女を素早くバギーに乗せ自身はアサルトライフルを手に取り雪原に伏せた。その間にも先程の場所でもう一つ血しぶきが上がるのを見て、撃っている方向に見当を付けて、注意深く狙撃手を探した。

そのうち、一台のトラックが近づいて来るのを見つけ、銃を構えて人間がいないのを確認して標準を合わせた。

「我々は貴殿方を撃つつもりはありません！」

そのうちトラックに備えつけられている拡声機から敵意がない事を示す声が聞こえたが、兵士は銃を降ろさずにいた。

「彼らは一体なんだったんですか？」

トラックから降りてきた軍曹と名乗った人間が話したすまえに兵士は尋ねた。

「彼らは我が国と長いこと戦争をしている国のスパイです」

「だから殺したのですか？」

「はい、旅人さん達を我が国のスパイと勘違いして報告しようとし

ていたのでやむを得なく射殺しました。そうしなければ関係ない旅人さん達が捕虜として拘束されてしまうところでしたから」

「…ありがとうございます」

「いえ、ではお氣をつけて」

軍曹はそれだけ言々とトラックに乗り込み、すぐに去っていった。

「しかし何故彼らが旅人だと分かったんですか？」

トラックを運転をしている兵士が軍曹に話しかけた。軍曹は「それはだな」と前置きをしてから言った。

「中立だったからだ」

「はい？」

「彼らが我が国のスパイ、敵国のスパイではないことは分かるな」

「…分かりません」

「お前はご馳走を眼前にして草を食うか？」

「いえ」

「あのまま一時間走れば国に着くのになわざわざ焚火などしないだろう。それに我が国にはあのタイプのバギーは存在しないからな」

「…なるほど」

「だから助けたのだ」

「優しいですね」

「当然だ、私は人殺しは嫌いだからね。早く戦争が終わってほしいのだよ」

“ E x c u s e ”

ここに私がいたことを証明するために私はこれを遺すことにする。王という立場故に私は全てを隠して生きていた。私には勿体無い身分だったのですぐに双子の弟を王の座を譲ろうとした。しかし弟は『兄だから当然』と聞きいれなかった。仕方なく私は王という身分を受け入れた。国の為に色々とした。どうすれば国民が飢えることがないか？どうすればよい法案を作ることが出来るか？どうすれば隣国と友好な状態を保つことが出来るか？私は考えた。考えるために勉強をした。その甲斐があつて国は大きくなった。それに伴つて国民の要求も大きくなった。私は努力した。しかし全てのことを良くすることは出来なかった。それは不満となつて溜つていった。溜つたものは必ず吐き出さなければならぬ。それは革命と言う形で吐き出された。

私以外を革命が始まる前に逃がそうとした。しかし彼等はそれを許さなかった。彼等は責任は自分達にもあると言つて聞かなかったのだ。私は弟だけでも逃がそうとした。弟は私の身代わりになり、私を逃がした。

弟の死を持つて革命は成功した。私は生き残り、国が見える湖の小屋に住むことにした。時折、国に入り町を見た。そこは私が王としていた頃より良くなつていた。私が死ぬべきだったのだ。私だけが死んで国を良くするべきだったのだ。

「ここに書かれていることは彼の主観から見れば全て真実です」ある国が良く見える湖の小屋で老人は兵士と少女に石盤を見せていた。「何故そう言い切れるんですか？」

少女は老人に尋ねた。

「私は当事者だからです」

「…弟ですか？」

兵士が出されたお茶を飲みながら尋ねる。

「はい、革命は成功しました。しかし誰一人として死にませんでした。側近達は兄を追い出したかっただけなのです。だから兄を国外に亡命と言う形で追い出した時には無条件降伏したのです」

「何故そんなことをしたのですか？」

「金のためです。彼等は兄を追放して金品を取るために革命が起こるように仕組みました。そして目論見通りになりました」

「貴方は何故協力したんですか？」

「私も革命が終わってから教えられたのです」

「そうですね…」

そこまで聞くと老人は窓から国を見ました。

「兄はあの国が良くなったと言いましたが見かけだけです。私は兄がいた頃の方が国は生きていたと思っています」

「……」

「聞きたいことがあるのですがいいですか？」

「私達に答えられる質問なら」

「この石盤に書かれていることを見て何を感じましたか？」

「言い訳です」

少女が即答しました。老人は微笑むと言いました。

「私もそう思いました」

“Food”（前書き）

今回はかなり短めです

“Food”

あるところに一人の兵士と一人の少女がいました。二人は車に乗って旅をしており、様々なモノを見ました。

ある時、二人は荒野で遊牧民族に出会いました。彼等は二人を見るところ言いました。

「旅の話聞かせてもらえませんか」

兵士は答えます。

「いいですよ。僕らは別段急いでるわけじゃありません。ですがまだ一年も旅をしていないので皆様が知ってることも多いかもしれません」

これを聞いた遊牧民族は早速、馳走と酒の準備を始めました。その様子をみて少女は兵士にだけ聞こえるように言いました。

「早くここから逃げましょう」

兵士は…

月明かりが死体と怪我人で埋まった荒野を照らしてました。

生き残った遊牧民族は口を揃えて言いました。

「久しぶりの食事に逃げられたが、アイツらは食料を作っていつてくれた」

“ B e n e v o l e n c e ”

穏やかな気候な草原を一台のバギーに乗った兵士と少女がいた。全く代わり映えのしない景色に飽きることなく少女は心地よい風を肌で感じながら見ていた。

やがて地平線の向こうに真つ白な塔が見え、少女が興味を持った。

兵士はそれが何なのか確かめる為に速度を少し速めた。

近づいて行くに連れて全貌が明らかになり、教会のような建物がぽつんと立っていた。建物から少し離れた所には川が流れており、水車小屋もある。小屋に近づいてみれば耕された土があった。今は何も生えてないが、綺麗に手入れされたそこは人がいることを示していた。しかしバギーの駆動音を聞けば様子を見るために窓から覗いたりするが小屋からも教会からも人影は見えない。兵士は拳銃に弾を込めて回りに怪しい物が無いか一通り確認すると小屋の扉に手をかける。抵抗もなく開き、中には保存された食料があるだけだった。次に教会の中を窺って見ると修道服を着た女性が一人、椅子に座り読書をしていた。バギーの音に気付かない程に集中しているようだった。

音を起てて開くドアをくぐると窓から見たより重く、全てを圧倒する空気に満ちていた。ステンドグラスを通して入ってくる光は、さらに場の空気を重くしている。そんな圧倒的な空気の中で読書をしている女性はドアの音に気付かず、活字の世界に入っている。

「すみません」

「……」

兵士が声をかけるが気付かずページを捲る。

「あの……」

「……」

少女が申し訳なさそうに声をかけても女性は二人を見向きもしない。

「…あのッ！」

「ふえ！？」

少女が耳元で大きな声を出し、女性はやっつと反応した。

「すみません。私、読書し始めると周りが見えなくなってます…」

落ち着きを取り戻したミカと名乗る修道女に案内され、二人は執務室でお茶を飲んでいた。

「それで、こんな所にいったい何の用事が？」

改めて兵士はミカを観察してみた。身長は少女より少し高いぐらい、顔にはメガネとそばかす、こちら辺の国では、まず見ることはない真っ黒な髪と瞳。そして腰にはリボルバータイプの拳銃が下げられている。

「私達は旅の途中で立ち寄ったのです」

「そうなんですか。ところでお二人は兄妹なのですか？」

ゆるい雰囲気を出しながら尋ねるミカに二人は顔を見合わせて吹き出してしまった。

「私達は偶然知り合っただけです」

久しぶりに人と話す機会なので夕食でもと誘われ少女は料理の手伝いを、兵士は散歩をしていた。

辺りを見渡せば遮蔽物のない土地にポツンと建っている協会。一人で手入れするには少し大きい畑、遠くの山から流れてきている川。

人が住める環境ではあるが少し気になることがあった。

一体彼女はいつからここで生活を始めたのだろうか。久しぶりと言っていたことから一年は経っているしれないが、それまで自分達みたいな旅人に会うことは無かったのか。

そんな疑問は少女の呼び声によって頭の片隅に置かれた。

夜は賊が出るからと引き留めるミカに兵士と少女は折角だからその言葉に甘えることにした。

「久し振りのベッドですね」

ベッドに腰をかけて嬉しそうに足をパタパタとする少女と対象的に毛布をかぶり寝る体制になっている兵士。そのうち、兵士が返事をしてくれないのに気づき少女もランプの灯りを消し眠った。

少女が安らかな寝息をたてているのを確認して兵士は懐中電灯を手には部屋を出る。そして迷いなく外に出るとそこにいた人物に話かけた。

「神に仕える人間が人殺しをしていいんですか？」

アーミーナイフを手には地に伏している人間を見下ろすミカは振り向くこともせず言葉を返す。

「これは慈悲です」

顔を上げて感情のない声で返答するミカの前に兵士は周りこみ、懐中電灯の電源を落とす。

「私は彼が間違いを犯す前に神の元に送ってあげただけです」

「俺は貴女の考えを理解しようとは思いません。ですが」

そこで振り向き、一発だけ発砲する。弾は近づいていた男を貫通し、一生立てなくした。

「死ぬのは嫌だし、あの娘を守りたいんだけど俺の行為は許されるのか？」

「力なき正義は理想、理念なき正義は欺瞞です」

「そうですね」

「もう行ってしまうんですか？」

次の日、朝早くに兵士と少女は旅の続きに戻ることにした。せめて朝食をと言つミカの誘いを断り、水と燃料だけを貰って二人は教会を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4956j/>

兵士と少女の話

2011年10月9日23時44分発行